



埋もれた婦人運動家(4) 八木秋子

——己れの足跡を消しつつ生きる昭和のアナキスト

自分の道を歩ききるひと□

八木秋子を私は稀なヒューマニストではないかと思っている。むしろそれは、民主主義、社会主義、共産主義、あるいは無政府主義、あるいは農本主義、さらに愛国主義その他等に底流するもの、あのヒューマニズムという意味においてである。それはけっしてファシストや一部の革命主義者のもつ権力主義や人間蔑視の支配的意識とは相容れぬものである。彼女の社会的活動の頂点は昭和のアナキストとしての活動であったが、そこにおいてもヒューマニズムはその色を失うものではなかった。むしろヒューマニズムの登りつめた理想主義の行きつくところとして、この反権力反国家の愛の思想に到達したものに他ならなかったであろう。私はそれを彼女の生きた

軌跡の上で証することができるよう思う。もちろん、ヒューマニズムとは他人のために自己を犠牲とすることもあり得る思想であり、人生観である。そこには自由についての徹底した考察があり、愛と自由との共立共存を目ざす一層すんだ境地を理想とするものとして、それはアナキズム即ち自我の拡大が他を侵すことのない自由の世界への渴望となるだろうことは、うたがいないところである。昭和のアナキズム運動についての評価が、ここで当然八木秋子の生き方の評価と重なって、その意義を再考慮されるべきものとなるであろうが、今ここに、八木秋子を考えるに当たっての重点は、七十歳を半ば以上超えた現在、そのかつての活動から自己のために何ものも残さなかった、ほとんど自己を消耗したのみで終った、にもかかわらず、なお自分の歩み

秋 あき

山 やま

(詩人)

清 きよし

の大筋について悔いるところがなかったであろうことを、その自信とその明るさの中に、感得させるもののあるところと在る。

いかにえれば、ささやかな足跡しか残さなかったかもしれない日本の昭和のアナキズム運動の中に、その人生のうちのもっとも活動的な時期を消費したのである。しかしそれを犠牲といつては誤りだろう。その中に自己を投入して生きたのであったといひ得べきではなからうか。すぐれた思想、注目と記憶に彩られる特異な活動、男の中の女としての稀少性。そういうものとしてではなく、自分主体に、自己をわが望む活動に捧げた、ウーマン・リブの人であったという理解こそ、この人のために必要なものではあるまいか。

宮嶋麗子が同志であった夫宮嶋資夫の陰にかくれて献身し、最後まで生きること苦し

んだ夫に協力しつづけた生き方とは、八木秋子の運動への参加のしかたは大部分がっている。アナキズム運動の振幅が狭まった昭和初期においてはあったが、秋子の活動はグループの運動の中心にあつて、運動全体を援けたともいえるものであり、また一個の推進力であつたと考えることもできよう。夫の陰の女であること以上に、すでに逸早く、男からの独立を体験したことにおいて、アナキストとしての面目がそこにある。それとヒューマニストの面との合体の中に、八木秋子にたいする私のイメージは浮んでくる。

私における八木秋子の回想は、昭和五年の九月のある日、「解放劇場」の稽古場に借りていた東京牛込算簡町の貸席の一部屋に彼女が来た時からである。解放劇場というのはアナキストの数少ない小説家として昭和はじめのプロレタリア文学運動の中で存在を知られた飯田豊二を中心にして、私ごとき物しらずが、彼との関係から事務の手つだいを引き受けたほどの、まったく素人の集りだった。

誰が八木秋子をつれて来たにしても、また彼女が演劇にまったく無経験の人であつたとしても、私たちの彼女にける期待は相当なものだった。というのは、私たちはその前年

(昭和四)の『女人芸術』誌上に展開された、やや時期遅れの、しかし強烈なアナ・ボル論争におけるアナキスト側の有力な発言者として八木秋子の名を知っており、またそれと同じころ、当時アナキストの最大の文芸誌『黒色戦線』に「一九二一年の婦人労働祭」という中篇の力作小説も発表していた。この小説は、その頃はまだわが国ではほとんど真相の知られていなかった、クロンスタットの水兵と市民が、ソビエト・ロシアの政府と赤軍の弾圧に反逆した事件に取材したもので、しかもそれを単なる報道の焼直しではなく、一個の小説に定着させたことで、一層注目値するものであった。

われわれが脚色上演しようとしていたアプトン・シンクレアの『ボストン』というのは、あの有名なサッコ・バンゼツチ事件を書いたもので、それは今もなお、アメリカという国家に体質的に脈打っているアンチ・ヒューマンな政策とともに回想される事件である。八木秋子が受けたのは、その劇のヒロインともいうべき、ボストンの上流階級に属する家の良心的なおばあさんであつた。

解放劇場の仲間にも三人か四人の女はいたが、まだ人数不足で、コルネリヤをやる適任

者がいなかった。そこで誰かが八木秋子をごに連れてきたのである。その後しばしば聞かされた彼女のこぼした話は、いつも

「セリフが二つか三つくらい、誰にでもやる役だから、やってくれ、といわれてつい来て見ると、私の役は、とんでもない、一番セリフの多い主役の一人だった。よっぽどことわるうかと思っただけけれど」というのであった。しかし物ごとに前向きで熱心に取り組む性格のままに、とうとうその役をやりおえた。熱心な飯田豊二の指導は、稽古期間六ヵ月、ともかく築地小劇場で二晩の大人満員という成果だったが、セリフを覚えるだけでも大変な役を、彼女は私たちの期待を裏切らずに、努力研鑽してやってのけてくれたのであった。八木秋子の生涯を考えると、私がわずかに経験して知ったこのような事実は、いつもその人のものであつたようだ。何ごとにおいても真向いになって一途に進んでゆく、全力的に立ち向う、という印象であつた。

私の記憶のなかにつよくのこっている『女人芸術』誌上のアナ・ボル論争を回想してみよう。

双方併せて登場回数十一(アナ系六、ボル系

五)のうち、八木秋子は三回、しかもその論

争の口火は彼女の同県出身の先輩藤森成吉に宛てた公開状を発端とするものであった。いまは論争の内容にまでは立ち入れないが、論争はやがて文学の範囲を超えて、世間からはすでに大正期に決定的であつたと見られていた、革命思想としての、アナキズムとボルシェヴィズムの政治思想の論争となつていった。

そのとき最初の藤森成吉への批判において

「マルクス主義の作家たちが彼等の文芸批評の標準を社会的価値(実はイズムの政治的目的への効果)に置いている上は、作家の自由性は抹殺されて作品はいきおい劃一的とならざるを得ない」

「プロレタリア大衆と叫び、反抗をぶちまけてみても、藤森氏の現在(プロレタリア作家となつた現在)の作品が初期のものより社会的普遍性において無産者の心をもつものとはいひ切れまい」

といつて、当時の公式主義的なプロレタリア文学の弱点に疑問符を呈しつつ、人道主義者でしかない藤森が共産主義に指導されるプロレタリア作家たることへの不信を衝くものであった。この問題意識はなお現在につづくものであることは周知のとおりである。つまり八木秋子はこのとき、藤森をとおして、政治的で公式主義的なマルクス主義プロレタリア文学の根本への反対意見を突きつけようとし

たのであり、それにつづけて「革命後の国家

権力による事物と生産過程の指導によって、やがて国家は、廃止されるのではなくて死滅する」というエンゲルスの楽天主義な説得に對して次のような反論を提出した。

「エンゲルスのいう如くに、独裁支配の必要も可能性もなくなつて国家権力が眠りこむ時代がよしんばあるうとも、それは民衆が権力の支配に慣れ、奴隷の服従と意識しなくなった状態、いいかえれば人間の自由意志が磨滅して文字通り眠りこんだ状態ではない。したがってその得るところの「自由」はみづからの意志によらず強制され、諦めさせられた末の自由である。その時その自由は自由の本質を失っているのだ。こうした社会が何で理想社会の言葉を許されるであらう」

これは「幸福な社会生活は自発的創造的意志によつて生れる」というアナキストの主張に沿うものであり、「革命活動は自己犠牲性を強いられる以上にそれ自体が生活のよろこびを伴うものである」とする今一つの重要な思考につながるものであらう。そしてこれこそ、八木秋子という一女性の変転の多かつた生き方を要約するに必要なテーマではあるまいかと私には思われる。いいかえれば理想をもち、それに邁進する者の姿である。あるときははうつしく、あるときは泥土にまみれたとしても、自分の道を歩いてきたという安堵

を伴つたことであらう。

神近市子以来の女性記者

八木秋子は明治二十八年(一八九五)九月に木曾の福島に土族八木定義の二男五女の末子に生れた。父は人徳無類の人で西筑摩郡役所に勤続二十八年の後福島町長に就任、甲信銀行頭取の従弟大沢の不正による銀行取付さわざで町長、郡会議長を辞任、そこから一家没落の浮目を見たのは大正三年のことだったといふ。

高等小学校を出て松本市の女子職業学校を卒業したのは大正五年、二十一歳のときであつた。まもなく長野県小学校教員資格検定試験に合格した。一家の没落に発奮した不屈の努力を語るものであらう。

しかし教員の検定にパスしてもすぐ就任したのではなく、翌大正六年、すすめられて結婚し上京した。だがやがてその結婚が失敗であることを自覚し、その結婚生活をつづけることの疑惑になやんだ末、かねて師事していた小川未明や尊敬していた有島武郎に実情を語り、その意見などを参考として、すでに母となつていたが離婚に踏み切ることができた。すでにして秋子はクリスチャンであつた。

娘時代には多彩に知識欲の赴くままに注意をひろくして、河井醉茗の「女子文壇」を読み、授書家だったこともあり、聖書の研究から内村鑑三にひかれ、ことに内村の訳詩を好んだことなどに、後年文学にかかわるに至った素地が見えるというものである。郷里の大先輩藤村への傾倒にはじまって漱石、蘆花に親しみ、白樺や青鞥への注意はその理想主義的傾向のあらわれであろうか。

大正六年に結婚して上京した時はすぐ三共製菓の事務員となって共働きするかたわら、小川未明に師事して童話をかき、また生田春月に逢った。その未明から対社会的開眼の暗示を得たこと、生田春月や、後に離婚に踏み切る示唆を得た有島武郎の訪問といい、大正中期のアナルコ・サンジカリズムの全盛時代に、やや外側のいたアナキストたちに近づいていたのは、どこにその理由を求めるべきであろうか。それは生来的な人道主義と、彼らとの接触から得た自由への開眼であろう。

その時代の離婚の実行ということは容易な出来事ではない。婚家を去ることは社会的なしきたり、強調すれば社会への反抗ですらあった。いわゆる良家の子女として育ち、父母近親に祝福された結婚からの離脱ということ

木秋子が日新新聞に入社した翌年すぐのことであった。それと同じ国会であららしい弾圧的な治安維持法が出来たのもまた忘れ難いところである。婦人記者として働きはじめとす、その激動の時代に、意識的にまた無意識的にかかわらざるを得なかった。

芸芸部の記者として次第に往來する範囲が広がるにつれて、その注目は当然社会的なアンバランスに向けられ、俸給生活者組合に加入を勧誘されて受諾したり、出はじめた無産者新聞を愛読したり、政治研究会員たることを慫慂されたり、身辺は急速にいそがしくなつた。まだ十分な判断を自前の思想的な立場に立って下すというまでには至ってばなかったかもしれないが、すなわちアナキストの立場に立って社会運動を批判的に見るというよりも、善意の赴くままに新しいもの、新しい出来事に触手を働かせて、下谷のどこかに在った労働学園に労働運動関係の集会有るときいて度々出かけ、時には進んで意見を開陳するような積極性を見せた。

ある日彼女は断髪した。生れつき毛が多くその始末が面倒だったというところから、婦人参政権運動にかかわっていた人の美容院を紹介され、これさいいいとそこで、ぱっさり

は、余程の自分への積極的な目ざめを伴うのでなければ為し難いことであつたはずだ、それはまた父母の手から夫の手に渡された妻の、女性としての自覚を伴うものでなければならぬ。

離婚後小川未明の世話で「子供社」という雑誌社に働いたが、四ヵ月後に退社して、上京して胃腸と診断された父とともに木曾へ帰郷した。これが八木秋子の、自覚ある生き方への出発だといふべきものであつた。

そしてなお、それにつづいて、アナキストとしての活動に入るまでに通らねばならぬ二つのこと、自立して生活すること、女性としての社会的な自覚をよりわがものとする、そのための階段が課せられていた。それは具体的には教員としての、いま一つは婦人記者としての、逸早く見合結婚した者には考えられもしなかった試験、あるいは彼女自身のための育成とも言うべき生活の時期であつた。

大正十一年、父の死の後には養わねばならぬ母と甥と姪（長兄の子）が残されており、県下の日義小学校の教員生活に入つた。やがて大正十三年六月に母が死亡し甥たちの身の振り方をきめて、家を整理して再び上京したのは、その年の秋であつた。

とやうてしまつた。まだ東京中にも四、五人くらいしか断髪女性は居なかつただろうという時である。そのことは新聞社幹部の期待する婦人記者のイメージからはずれぬものとなつた。婦人記者はまず女でなければならなかつたのである。女とは男と対等に社会的な活動が必要とするものではなかつたようである。八木秋子の場合は、新聞社の与えた仕事、期待することの範囲からはみだして、先端的な女性活動家としての自己の道を開拓するかに見えたのかもしれない。先端的なものは反抗的に見える。新聞社の期待をあまり気にもかけずに活動していたことには、この人の生れながらの善良さが現われている。東京日日新聞としては男に伍してひけをとらないような社会的活動家の婦人記者はいらなかつたのであろう。すでに先輩の神近市子において懲りていたところ、八木秋子が社会主義的に傾き、モダンな断髪女性となつては、もはやこれ以上の寛容は与えられなかつた、ということであつただろう。かくして入社一年半ほどして、退かざるを得なくなつた。

「女人芸術」アナ・ボル論争の旗手
断髪の女記者といえはこれはまさに昭和の

翌年、東京日日新聞の芸芸部に入社することになったが、それは「位牌の入った行李を持って上京したが就職は八方ふさがり」という、自分のおかれた境遇を書いて東京日日新聞に投書したものがきっかけとなつて、婦人運動家の小山いと子と逢い、その夫の新妻莞（当時東京日日の整理部長）に知られ、やがて同社主幹の城戸元亮の審査を受けた上で、神近市子が葉山事件で辞めて以来、婦人記者は入れぬことになつていたという禁を解いての入社となつたのであつた。大正十三年十一月のことであつた。

そして大正十五年いっぱいまでそこを辞めたが、彼女のヒューマンで一途な善意による活動は、あるいは大新聞の記者として必ずしも最適とはいへなかつたかもしれない、と自ら回想している。

しかしその間の活動はなかなか積極的であつたようである。

関東大震災後のこの時期は、社会的変動期、激動期といふべきものであつた。震災をきっかけとして民衆勢力の擡頭にたいする反動的な圧力は、国家の政治権力を挙げてのほげしいものであつた。長い運動の歴史とともに、ようやく普選法が国会を通過したのは、八

モダンガールである。だが秋子はモダンガールではない。新聞社を辞めはしたが、教育新聞その他に職を得たり、普選目当ての日刊新聞社長秘書などをつとめた後、東日記者時代に一面識のあつた長谷川時雨が「女人芸術」をはじめたとき、同人に加わつてその編集に当ることになった。わが国の文壇というものとは彼女が初めて多少のつながりを持った時期といふことができよう。この雑誌は昭和三年から六年までつづいた。「女人芸術」はあくまで女ばかりの雑誌であり、女流作家を育てようとの狙いがあり、したがって文芸春秋社などとの交流もあつた。文壇の野心あるいは文筆業への思惑が強かつたらこれは絶好の場所だつたかもしれない。しかし、「女人芸術」に執筆しながら、その一方ではアナキズムの活動にしたいに参加していったのである。「女人芸術」に加わつたその翌昭和四年の七月から、同誌上に熾烈なアナ・ボル論争が展開されることとなつたが、これはあるいはわが国における最後のアナ・ボル論争といふべきものであつたかもしれない、その参加者が殆ど女性ばかりだということもあつて、いままなお回想される性格のものである。

最後のアナ・ボル論争が何故に、「女人芸

術』の誌上に起ったか。その理由は二つある。一つは「女人芸術」が女性の執筆者を、文学と思想における流派と主張にかわりなくひろく集めたこと、いま一つはアナキスト八木秋子が編集部に居て、たまたま当時勢力の拡大したプロレタリア文学運動に転身して来た藤森成吉に、公開状をかいてその転身の非文学性に疑問符をつけた、そのことが直接の発火点となったのである。だが仔細に見るならば、そのとき八木秋子の批判は、かつてのヒューマニスト藤森にたいして、頗るヒューマナな見地から発した質疑であった。むしろそれに對する藤森の応答が意外に居丈高で、日本のマルクス主義的革命的勢力を背負っているかのような倨傲さが論争を導くものとなったといひ得るかもしれない。

この論争の参加者の名だけを挙げておくとアナキズムの側からは他に高群逸枝、松本正枝、ボルシェヴィズムの方から藤森成吉、中島幸子、隅田竜子であった。そしてこの論争もまた大正のアナ・ボル論争と軌を一にして、いつの間にか政治的な論争となつてしまつて文学のための稔りには見るべきものがなくなつた。以前この論争を調べて昭和四十二年四月の『黒の手帖』にその報告をかいとき私は、

やや結論的に以下のような意見を述べたことがある。

「八木秋子が藤森成吉に向けた質問のはじめは文学のことであり、作者の誠実という問題であつた。『政治的目的のために観念的な作品を書く』ことが人間に誠実な作家としての矛盾ではあるまいか、ということであつた。藤森がやや高飛車にレーニン『の國家と革命』などを持ち出したのは、八木の質問にストレートに答えるには藤森の心中に何かのたまりがあらつたものではあるまいか。つまりいくらか痛い質問だつたのであるまいか。しかし当時ナツプに属していた藤森はこれいくらか痛い質問の痛みを自ら十分受けとめることができず、したがって質問に正当な回答ができなかつたのであるまいか。党の方針の命ずるままに、革命のために最も手近に必要な作品を書くのが正しいのだと強く言えるにはヒューマニズム作家藤森にたまりがあらつたのかもしれない。そこから問題が革命論争に飛躍して文学が置去りにされた。作品の文学的価値よりも、作品の政治的価値の方が問題視される季節でもあつたのである。」「『女人芸術』誌上のアナ・ボル論争」

このような季節であつたから、この論争にこれといった稔りはなかつたが、それらしい結果はあつた。隅田竜子が昭和五年一月の『女人芸術』に「再びアナキズムを駁す」を書いたのを最後に、はてしなく見えた論争は長谷川時雨によって「心ならずも」打ち切られたが、八木秋子はさらにその次号の「文

芸時評」で次のように書いた。事実上はこれが半年に及んだ同誌上の論争の終結となり、あるいは劣勢に見えたアナキズムが劣勢の自覚の故にその主張を徹底させたといえることであつたのかもしれない。

「昨年（一九二九）はプロレタリア文芸批評家は華々しい論争によって活躍した。形式と内容、プロ文学の大衆化、プロレタリア・リアリズム、あるいは芸術批評の規程について社会的価値と芸術価値の二元論か一元論かの問題、等々。——ことごとくマルキシズムの理論の規程のもとに価値を決定するべきである、といったように。芸術が本質的に反撥する支配、統制、制一などが集团的に行われるところ、文芸の自由は極度に束縛され失われる。」

「謙遜な意味で私は作者その人の偽らぬ言葉がききたかつた。一切の清算された要素を無に敵い、自分をゆがめ、文芸に階級闘争意欲を託して安住したいらしい楽天性、ナンセンスに合流してゆくメカニズムとモダン性を、何とかして合理づけようとする態度が嫌なのだ。」

この八木の発言は、論争が禁じられた後の感想であるとともに、アナキズムの側からするそれへの結語でもあつた。この終りの方の言ひ分などは、論争の発火点となつた八木から藤森への謙虚な公開状の主旨とまかつく一つである。つまり、対立し論争はしたが、何一つ文学の問題としては、開けるものがなかつた、ということである。

つた、ということである。

しかし八木秋子自身にとつては収穫だつたと思う。おそらくアナキズムを立場として公に、対外的に、論争を展開したのはこれが初めてではなかつたかと思う。また、この直後、アナキズム系の女性たちが集まつて『婦人戦線』という初めての集団とその機関紙をもつまでに至つたことも、この論争に共感した人のあつたことを語っている。そこに集まつた主要な人々として高群逸枝、住井すえ子、碧静江、鎌田貞子、望月百合子、松本正枝、伊福部敬子、城しずか、竹内てるよ、八木秋子らの他に平塚らいてうも有力な同人であつた。ということはこの集団の間口が意外にひろいものだったことを語っているが、それは『女人芸術』誌上の論争に示されたマルクス主義系の芸術政策が政治主義に行きすぎて自由を忘れたことにたいする反対の態度への共感が引き出されたからであらう。このグループ「無産芸術連盟」は、強権主義の否定、男性清算、女性新生という三つの標語を掲げていた。これは明治の「青鞥」の主張にその性格において酷似して見える。平塚らいてうの参加はその故かとも思われるが、現実的には普通選挙法は出来ても女性として解放に向つ

て獲得し得たものの何一つなかつた時期であつたことを知っておかねばなるまい。アナキズムによつてこそ女性の自由と解放があり得るという意気込みがこの標語となつたものである。すでに常識的にまでなつていた階級闘争をうたわなかつたところに、その自覚の在り方を見るべきであらう。それは昭和はじめの日本におけるアナキズムが、いわゆる純正無政府主義に殆ど一辺倒していたことともかかわるものであつたかもしれない。

農村青年社の指導者として

「解放劇場」が『ポストン』の上演を終つてから八木秋子はバアのママムになつた。むろん雇われママムである。四谷駅に近い四谷新道は、あの付近としてはちよつとした盛り場らしい細い通りであつた。四谷駅から上つて来て、都電の停留所を越えて行つた通りの右側にバア・ホブラはあつた。バアを始めたから、というのでいつてみると厳然とママムらしく断髪姿でひかえていた。農村青年社の活動が私たちの目にも見えはじめていたころである。その仲間の女たち、あるいは同志の若い細君なども働いていたような記憶が漠然と私にはある。

日日新聞をやめて、民権新聞社長秘書をやつていたころ、その新聞社の工場でストライキに來た印刷工などが、彼女の家に集まつていることが、同社の支配人に知られたなどという、人のいいエピソードものこつていて、そのころはもうアナキストとの往来も多かつた。日日新聞退社、民権新聞、女人芸術、婦人戦線という順序で進むその一方で、農村青年社の出発に加わつていたのである。昭和のアナキズムを語るとき、われわれは黒連（黒色青年連盟）と自連（全国労働組合自由連合会）の活動に出遭つて、ある苦渋を感じた。たしかにその理論は尖鋭にしつらわれていた。だがその一方でその勢力は後退の一途であつた。理論の尖鋭と実勢力とのアンバランスということが昭和のアナキズムの姿を語るもつとも端的な表現かもしれない。そこでは労働運動を始めとして一切の組織活動からはじき出された。組織には指導部、執行部が必要であり、その中心部に権力が生じ、支配関係が生ずる。それはボルシェヴィキに通ずるものとして征伐するべき思想とされた。かくて大正期のアナキズム運動が残した労働運動における勢力さえ殆ど失われんとした。この観念的なアナキズムへの傾倒は反論し

がたい純粋性を示すかのようであった。さらには、そのような非組織的な純粋論は日常生活の中での活動に否定的であった。

昭和十一年時代に現れたアナキズムの無気力は、抽象的な一揆暴動主義の「即時武装蜂起せよ」の掛声を生み、一切の無活動が、やがて起るべき武闘のための準備期間であるかのような錯覚をさへひろげかねないものであった。そのような運動は、それを予告し予想すべきものではあり得ない、ということによって、無気力と無活動を合理化さえすることがある。

この恐るべき沈滞を打破すべく、全村運動のプログラムをとって立ち上がったのが、農村青年社の結集であり、つづいて無政府共産党であった。昭和に入ってから八木秋子の活動は、やがて農村青年社と共に在ったことで、現在その記憶を新しくしつつある。その全村運動というのは、農村の生活の中に入つて自治体としての農村をまるごと自立せしめようとする方向を自覚的に現実化しようとするものであった。勢力をもつていた純正無政府主義派からの弾圧を受けたほど現実的な性格をもつものであったとも考えられる。

農村青年社の活動は、しかし目的は手段を

己れの足跡を消して

第二次大戦における日本の敗戦は、一たび離れた解放運動、社会運動に多くの人々を再びその席に戻らせた。戦争中の向戦一辺倒の活動家さえ、そこへの復帰が許されないものでもなかった。その復帰は当然でありかつ華々しいもののごとくにさえ見えたが、復帰せざりし者の一人として八木秋子がいたことを知る人さえもいまはすくない。

彼女が情熱を傾けた農村青年社は潰滅したとしても、日本の戦後にアナキズムが行方不明になつていたのではない。むしろ八木はその動静を注目してはいたはずだ。一方戦後における浮浪母子寮への就職から、どん底の母子の生活以下の生活に立ちまじり、地域社会の生活運動としての母子更生協会、労働省の婦人少年局の運動に土曜会員として加入したり、定時制高校の調査に至るまで、底辺の人々への共感に動かされたかのごとくである。

ジャーナリズムの世界から歩み出し、多少とも名を知られ、また反逆的な運動に正義感をもやして来た者の成行として、戦後のかかる動向を如何に解すべきであらうか。

八木秋子のヒューマニズムをそこにこそ見

えらばずの信念にまで到達し、バアの経営も彼女自身にとってはその一すじのものでしかなかったであらう。運動の資金稼ぎのためには一味に窃盗行為さえも起った。

昭和七年の四月のことであった。八木秋子もそのとき捕われて東京地裁で起訴され、実刑も受けた。

純正無政府主義が無気力に陥つた時期に生誕した今一つの新しい組織、無政府共産党が所謂銀行ギャンブル事件から足がついて全国的に検挙が及んだのは昭和十年十一月、その党の主謀の一人二見敏雄の捜査から、農村青年社の活動が遡って治罪法で起訴されるに至り、翌年同社に関する記事の差止めが解除され一都十三県にわたる蜂起暴動計画として報道され、長野県下で十五名、全国では三十名以上の起訴となり、八木は懲役二年の判決を受けた。同社の主要なメンバーでは宮崎晃、星野準二が三年、鈴木靖之が二年半ということであつたに比べて、この事件におけるこの人の立場の如何を、これは十分想像させるものがある。

しかしアナキストとして今八木秋子を語る人はほとんどいないかのようである。ということは、彼女はその運動の中心の存在であつ

なければならぬと思う。運動の資金稼ぎのために窃盗団の仲間入りまでも敢てした。

それは四十年前のことであつた。アナキズム運動にも母子寮への献身にも、満州の開拓地への転出まで、もしこれをその内部において一貫するものがあつたとすればヒューマニズムを他に何ものもなかったであらう。

強大な権力への反逆的な活動はその見返りとして得らるるものは、それを為した、自己を良心に挺じたという無形の慰め以外に何もものない。むくわれるためにはなく、自己の発散以外のものとしては考えられない程、かつての治安維持法の下における社会活動は出発から勝利を予想させるものはなかった。それに自己をかけた人々が美しいのは、国民や民族のための献身者以上である。何故か。それは活動期においてすでに彼我の実力隔絶の中に立ち上るのであり、敗北後において生活のための自己保存すら危い境涯を流浪しつつけなければならぬことを運命とせざるを得ないからである。

それはひとり八木秋子のみの運命ではない。しかし、たとえば彼女と行動をともにした男たちは、この結社の潰滅後に再出発して家をなすこともできないではなかった。ひと

たにかかわらず、活動の面において必ずしも表に出づつぱりの存在ではなかったからであらう。また女はいつも一歩退いた存在として認識される戦前の習慣がそこに介在していたためかもしれない。すでに支那事変の前夜で、反国家的な運動が縮小の一途を辿つてゆく過程のなかに、その全体像と人々が見失われたという傾向も大きくあつたであらう。

ハウスキーパーとして、アジテーターとして、理論追求者として、同志の潤滑油的存在として、兵站部として、じつに各種の役目が必然的に、集団における唯一人の主要な女性であつた彼女には課せられたはずである。そしてその集約としての刑期を終えて自由となつたのは昭和十三年四月であり、その直後に満州へ渡つた。新京で満鉄支社長に紹介され、前歴を表明して満州の農民として生涯を果したい希望を述べ、満鉄新京支社の福祉係として留守宅相談所に勤務することとなつた。日本の敗戦によって昭和二十年十一月に引き揚げて、母子寮、母子更生協会等に勤務、やがて母子寮の整理に達して退職した。昭和三十六年、帰郷して姉の死に逢い、昭和四十三年上京、現在は多少の文筆収入などで過している。

リヒューマニズムから後退せず、常に何ものかの己を提出しつつけながら、八木秋子は孤獨的な生涯の中に置かれていくごとくである。ここに私は一九七〇年代において、男と女との、社会における生き方の苦楽の差を見出さざるを得ない思いがする。そしてさらにその中に在って、他のために自己を提出しつづける者は、いつの日もその同じ姿勢に自己をいささか漫画化してさえているのではないかと、ふとそう思うときがある。だがそれはまったくちがつていて、悔いの少ない生涯というものは、自己を提出することによって自己を生かすことのできる人々にだけしか得られないのではないか。毀譽褒貶の外に存在し得るからである。

私があわただしい日時の間に八木秋子の生涯をデッサンしようと思いついたのは、精一ばいのヒューマニズムに己を捧げて悔いない老年を迎えつつある人の中に、自身もさほどとは思わない、報われることのない同志への、それによって運動への献身を見るからであり、むくわれざることを当然としていられるばかりか、潜んで、自己の足跡をすら消しつつ生きる姿を、見出したと思うからである。